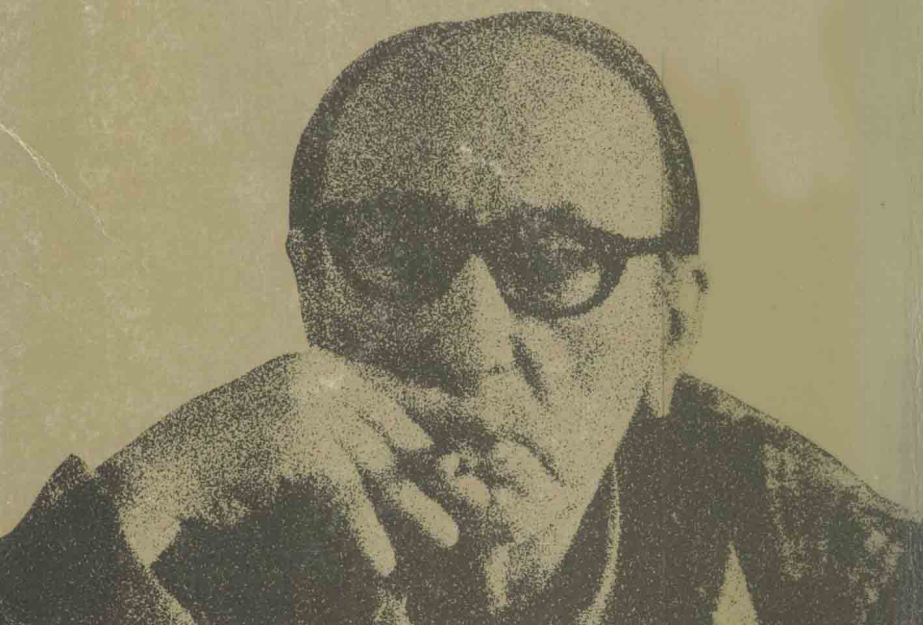


ミハイル・バフチン著作集⑥

小説の時空間

ミハイル・バフチン著 北岡誠司訳



訳者紹介

北岡 誠司 (きたおか せいじ)

1935年東京生れ。東京大学大学院比較文学比較文化専攻博士課程中退。現在、奈良女子大学文学部教授。物語の理論専攻。(著書)『文化を読み解く——洞壁画から物語まで』大阪書籍 (訳書) バフチン『言語と文化の記号論』新時代社、プロップ『昔話の形態学』白馬書房、イワーノフ／トポロフ『宇宙樹・神話・歴史記述』岩波書店。

小説の時空間——ミハイル・バフチン著作集⑥

一九八七年七月二十五日初版発行 ©

定価三四〇〇円

訳者 北岡 誠司

発行者 加藤 宣幸

〒101 東京都千代田区神田神保町一丁目
発行所 新時代社

電話 〇三九三〇八四

ISBN 4-7874-3016-5
落丁本・乱丁本はお取替えいたします

小説の時空間

М. М. Бахтин

Формы времени и хронотопа в романе, в кн. Вопросы литературы и эстетики, М., 1975.

目

次

凡例

はじめに 7

第一章
ギリシヤ小説 11

1、筋の図式 14

2、冒険譚的な時間 17

3、抽象的な異国の空間 36

4、人間像——自己同一性と試練—— 47

第二章
アプレイウスとペトロニウス 61

1、人間像——変身—— 64

2、変換の冒険譚的な時間 72

第三章 古代の伝記と自伝 99

- 1、ギリシャの二類型——プラトン型と広場のレトリック——
- 2、ローマの自伝——家・プロディギア・著作目録——

114

100

第四章 歴史のさかしまとフォークロアの時空間の問題 131

第五章 騎士道小説 141

第六章 小説における悪漢・道化・愚者の役割 155

第七章 ラブレーの時空間 171

- 1、人体の系列 178
- 2、飲食・大酒の系列 192

3、排泄物の系列 210

4、性の系列 215

5、死の系列 222

第八章 ラブレーのクロノトポスのフォークロア的基盤 247

1、フォークロア的時間の特性 248

2、古来の隣接複合の変容 262

3、古来の隣接複合の存続 268

第九章 小説における牧歌的クロノトポス 281

第十章 結びの言葉 317

解説（北岡誠司） 348

凡例

一、本書は、ミハイル・バフチンの論集『文学と美学の諸問題』（一九七五、モスクワ）
 Михаил Михайлович Бахтин. Вопросы литературы и эстетики. に収められた論文「小説における時間と時空間の諸形態」Формы времени и хронология в романе の全訳である。原文は、「結びの言葉」が一九七三年の加筆である他は、すべて一九三七―三八年に書かれたものである。

一、固有名詞の表記に関しては、現行の表記法に従い、とくに統一ははからなかった。

一、原文の字間あけはすべてゴチック体で表わした。また（ ）は訳者の補足である。

一、各章内の区分と小タイトルは訳者によるもので、原文にはない。

一、原注および訳者による注はすべて見開き左頁の端に入れた。

はじめに

文学が、歴史のなかの實在の時間・空間と、そのなかで自己を開示する實在の人間とを自らのものとする過程は、複雑で断続的な道筋をたどってきた。しかも、文学が自らのものとしてきたのは、實在の時間・空間のすべてではない。人間の歴史の各段階でとりあつかいうる、時空間の個々ばらばらな局面である。それに対応して、文学がつくり上げてきたのも、現実のうちから自らのものとした時空間の局面を投射し芸術的に処理するのに適したジャンルや、各ジャンルに固有の方法である。

7 はじめに

文学がこのように芸術化して自らのものとしてきた、時間的關係と空間的關係との本質的な相互連関を、ここでは、クロノトポスと呼ぶ（「クロノトポス」とは、文字通りに訳せば、「時空間」である）。これは、相対性理論（アインシュタイン）を基盤に導入され基礎づけられた用語で、今日数理的な自然科学において使われている用語である。しかし、われわれにとって重要なのは、こ

の用語が相対性理論においてもっている専門的な意味ではない。われわれは、この用語を、ほとんど比喩として文学研究の領域に移入する（ただし、ほとんど比喩としてであって、まったく比喩としてではない）。つまり、われわれにとって重要なのは、この用語のうちに、時間と空間とは切り離しえないことが示されている（つまり、時間が空間の第四次元として示されている）という点である。さらに、ここでは、クロノトポスなるものを、文学の形式Ⅱ内容上のカテゴリーと解してゆく（したがって、文学以外の他の文化の領域におけるクロノトポスについては、ここでは触れない）。⁽¹⁾

文学におけるクロノトポスの場合、空間上の特徴と時間上の特徴とは、意味をもつ具体的な全体の中から融合する。時間は、凝縮されて密になり、芸術化されて可視的になる。空間も、集約されて、時間・話の筋・歴史の展開のなかに引き込まれる。時間の特徴が、空間のなかでその本質をあらわにし、空間は、時間によって意味づけられ計測される。両種の系列のこうした交差、双方の特徴のこうした融合が、文学におけるクロノトポスの特性である。

文学におけるクロノトポスは、文学の各ジャンルを決定するうえで本質的な意義をもつ。なぜなら、文学の各ジャンルのあり様を決定するのも、一ジャンル内の各下位ジャンルを決定するのも、まぎれもなくクロノトポスだ、と端的に言えるからである（もともと文学の場合、主導的な原理として働くのは、「空間の方ではなく」時間の方であるが）。しかも、クロノトポスは、形式Ⅱ内容上

のカテゴリーとして、(相当程度)文学のなかの人間像をも決定する。文学のなかの人間像は常に、本質的にクロノトポス的である。⁽²⁾

すでに述べたように、文学が歴史のなかの实在の時空間を自らのものとする過程は、複雑で切れ切れの道をたどってきた。自らのものとしたものも、所与の歴史的条件のなかで近づきうる若干の一定の側面であった。そこで、自らのものとした实在の時空間を芸術化して投射する形式としても、それに見合った一定の形式「ジャンル」のみがつくり出されてきた。それらのジャンルの形式も、当初は多産であったが、伝統によって強化されると、現実的に見るともはや多産で適切だという意義をまったく失った後にも、文学の以後の展開過程のうちに執拗に存続した。そのため、文学のうちには、互いにまったく違う時代の現象が同時に共存することになる。そこで、文学の歴史の道筋

(1) 筆者は一九二五年の夏、生物学におけるクロノトポスに関するA・A・ウフトムスキイの報告を聞く機会があった。その報告では美学上の問題も触れられていた。

(2) カントは、「先験的感性論」(「純粹理性批判」の根本部門のひとつ)のなかで、空間と時間を、本的な感覚や表象から始まるあらゆる認識にとり、欠かすことのできない形式だと定義している。われわれも、両形式が認識の過程でもちうる意義に関するカントの評価は受け入れる。しかし、われわれはカントと違い、空間と時間を、「先験的な」(「純粹」形式であるとは解さない。实在の現実そのものの形式だと理解する。「こうした理解を前提に」小説なるジャンルの諸条件のもとで、空間と時間の形式が、具体的な芸術的認識(芸術的直感)の過程で果たす役割を明らかにしてみようと思う。

は、きわめて複雑なものとなる。

歴史詩学の概説を意図する本書では、いわゆる「ギリシャ小説」から始まってラブレターの小説で終るヨーロッパ小説の、さまざまな下位ジャンルを題材にして、この錯綜した文学の道筋を示してみたい。それは、類型論的にみて、この時期につくり上げられたクロノトポスが持続力の強いものであり、その持続力の強さが、以後の時代の小説の若干の下位ジャンルにもあらかじめ一瞥をあたえることを許すからである。

われわれの理論的な定式や定義が正確で完璧だというつもりはない。芸術や文学における時間・空間の形式にかんする研究で信頼できる仕事は、国内でも国外でも、ようやく最近始まったばかりである。こうした信頼できる仕事が今後進捗してゆくなら、本書で示した、小説のクロノトポスにかんする特徴づけも、いずれはそれによって補足され、おそらく、本質的な修正を加えられることになるであらう。

第一章

ギリシャ小説

すでに古代の土壌の上に、小説の作品世界を統一する仕方の本質的な類型、したがって實在の時間・空間を小説のうちに芸術化し自らのものとするのに適した方法が、三種類成立している。つまり、すでに三種のクロノトポスがつくられている。しかも、これらの三種の類型は、その後判明するように、きわめて多産、きわめて柔軟であり、十八世紀半ばまでの「恋と冒険とを語る」エウアンチュール冒険小説すべての展開をも、多くの面で規定した。そこで、まず初めに古代の三種の類型を、

あらかじめや詳細に分析しておく必要がある。それを基にするなら、これら三種の類型がヨーロッパ小説のなかで経験したさまざまな変形を順次開示し、ヨーロッパの土壌そのものの上でつくり出された新たなものを明らかにすることも可能であろう。

以後の分析でいずれの場合も、集中心的に関心を向けるのは、（クロノトポスの主導原理である）時間の問題である。時間の問題に直接にかかわりのあることのすべて、しかも、そのみである。ただし、三類型の発生の歴史にかかわる問題はいずれも、ほとんどまったく考慮しない。

古代小説の第一の類型（年代順に言つて第一という意味ではない）を、ここでは仮に「試練の冒険小説」と呼ぶことにする。ここに属するのは、二世紀から六世紀にかけて形成されたいわゆる「ギリシャ小説」あるいは「ソフィスト小説」のすべてである。

そのうちで、今日まで完全なかたちで残存しロシア語訳のある作品をあげておくと、ヘリオドロスの『エティオピア物語』（あるいは『アイティオピカ』）、アキレウス・タティオスの『レウキッペーとクレイトポーンの物語』、カリトンの『ケレアとカリエロの愛の物語』、エペソスのクセノポンの『エペソス物語』、ロンゴスの『ダフニスとクロエ』である。その他の若干の代表的な作例は、断章もしくは語り変えられたかたちで、今日まで残存する。⁽¹⁾

これらの小説のうちに認められるのは、冒険譚的な時間の、きわめて繊細に練りあげられた類型である。この時間に特有のさまざまな特徴やニュアンスもふくめて。冒険譚的な時間の洗練も小説におけるその活用の技術も、これらの小説のうちで、すでに高い水準に達し完璧なものになっている。そのため、純粹に冒険譚的な小説のその後の展開も、冒険譚的な時間にかんしては本質的なものは、今日にいたるまで何ひとつ付け加えてはいない。そこで、冒険譚的な時間の固有の特性は、これらの小説を手がかりにした場合に最もよく明らかにできる。

(1) アントニオス・ディオゲネス『トゥレの彼方での異常な出来事』、ニーナ物語、王女キオネの物語その他。

1、筋の図式

これらの小説はいずれも、その筋立てにおいて、互いにきわめてよく似通っている（これらの小説に最も近い直接の後継者であるビザンティオンの小説の場合と同じく）。本質的にはまったく同一の要素（モチーフ）から組み立てられている。個々の小説で変るのは、これらの要素の数、筋全体のなかでの比重、結合の仕方である。そこで、これらの小説の筋を総括した典型的な筋の図式を、比較的重要な逸脱や個々の異態^{グアイヤ}の指摘をもふくめて作るとは、容易である。その図式は、次のようになる。

婚期に達した若者と娘。二人の出自は、不明で秘密である（もつとも、常にそうだとはい限らない。たとえば、タティオスの作品はこの要素を欠く）。兩人とも絶世の美男・美女である。また例のないほど貞節で誠実である。二人は不意に出会う。それもふつう祝祭の日に。互いに相手に対し、運命か不治の病のように打ち克ちえぬ恋心を、突如一瞬のうちに燃え上がらせる。だが二人の結婚はすぐには成立しえない。結婚を遅らせ押し止めるさまざまな障害が待ち受ける。恋人たちは引き離され、

互いを捜し求め、見出す。再び見失い再び見出す。恋人たちを妨げる出来事や障害は、ふつう、結婚式前夜の、花嫁の略奪、(両親がいる場合には) 恋人たちの双方に対して、別の花婿・花嫁(二セのカップル)を予定していた両親の反対、恋人たちの遁走、道行き、海上の嵐と難破、奇跡的な救助、海賊の襲撃、捕虜・投獄。主人公・女主人公の純潔を奪わんとする企み、女主人公を贖罪のための生贄として供犠、戦争・闘い、奴隷に売られる、偽の死、変装、認知あるいは認知されない、見せかけの裏切り、二人の貞節への誘惑、罪を犯したとする誤った非難、裁判、二人の貞節・誠実さを試す裁き、(両親が未知であった場合には) 主人公が両親を発見、などである。これらの一連の出来事のうちに、思いもかけない味方あるいは敵との出会いが、大きな役割を果たす。占い、予言、未来を予告する夢、予感、催眠剤なども同様の役割を果たす。恋人たちの幸せな結婚によって小説は終る。以上が筋の基本的な構成要素の図式である。

こうした話の筋は、きわめて広い範囲におよぶ多様な地理的環境のなかで展開される。ふつう、海によって隔てられた三ヶ国から五ヶ国(ギリシャ、ペルシャ、フェニキア、エジプト、バビロニア、エチオピアなど)を舞台にして展開される。小説のなかで、国・都市・さまざまな建造物・芸術作品(たとえば絵)・住民の習俗・エキゾテックで奇怪なさまざまな動物その他の珍奇な品など、これらのさまざまな対象の若干の特徴にかんする描写——時によるときわめて詳細な描写——